

ESL 政策を堅持する香港の英語教育から 日本の英語教育への示唆¹

— その2 —

村上美保子（星城大学） / 高島英幸（東京外国語大学）

今井典子（高知大学） / 東野裕子（西宮市立高木小学校）

奥村耕一（横浜市立旭中学校） / 石毛佐和子（旭市立三川小学校）

牛山真弓（茅野市立東部中学校） / 斯波隆晃（東庄町立石出小学校）

人見徹（東京外国語大学大学院）

同タイトルの「その1」では、香港における主に初等学校の授業について述べた。本稿では、中等学校における授業について言及し、香港の英語教育の総括を行う。

1. 香港の中等教育

香港の中等教育段階には、英語以外の教科を広東語で教える学校 (Chinese-medium instruction school, 以下 CMI 学校) と中国語以外の教科を英語で教える学校 (English-medium instruction school, 以下 EMI 学校) がある。植民地時代にエリートを育てるために設立された EMI 学校が、より「上位」の学校だと考える風潮が残っており、多くの EMI 学校が設立されてきたが、中国語の重要性が高まったことを背景に、1998 年に政府は教授言語として英語を使用することを認可制にした。その結果、EMI 学校として残ったのは 114 校 (2009 年度、CMI 学校は 282 校) であった。近年再び英語力の低下を問題視する見方が広まり、2010 年から、一定の基準を満たせば教授言語について学校裁量で英語による指導の割合を調節 (fine-tuning) できるような制度が改正された。

また、日本の『学習指導要領』に相当する *English Language Curriculum and Assessment Guide, Secondary 4-6* (2007) によると、コミュニケーションの目的を持つタスクに取り組みさせて課題解決的な学習をさせることを重視し、タスクによる指導

を推奨している。今回の視察では、EMI 学校2校と CMI 学校1校の10クラスの授業を参観する機会を得た。本項では、各学校からそれぞれ1～2つの授業²を報告し、日本の中等教育における英語教育への示唆を述べる。

1.1 The Church of Christ in China Ming Yin College

1966年に設立されたEMI学校で、全校生徒は1,152人である。Form 1（以下F1）からForm 5（以下F5）までは各学年4～5クラスあり、Form 6（以下F6）では文系と理系クラスに分かれる。1クラスあたりの生徒数は40人程度である。生徒の多くは、英語以外の教科を中国語で授業を行う小学校から入学している。全教師57人のうち英語教師は12人で、ネイティブ・スピーカーの英語教師（Native English-speaking teachers, 以下NET）は1人である。

時間割は曜日に関係なく7日間で一巡する方式で、英語の授業は、F1～F3が1サイクルにつき11単位時間（1単位時間は40分）、F4が10単位時間、F5で9単位時間、F6で8単位時間である。NETは、1サイクルに1単位時間分、F1からF3までの全生徒のプレゼンテーション準備の指導に携わっている。また、F1の生徒は図書室に備えられた英語の本を1サイクルに1単位時間読む取り組みが行われている。さらに、課外活動としてEnglish societyと呼ばれる組織を構成し、全ての生徒がディベート大会やプレゼンテーション大会に参加している。

1.1.1 Form 6（高等学校3年）の授業

Modern Short Stories という短編小説集の中のJ.G. Ballard 作の *Having a Wonderful Time* という短編を扱う授業であった。生徒は32人で、各4人の8グループに分かれて着席し、この話の内容をグループで確認し合った後、教師が指名した生徒2人が前に出てあらすじを発表した。2人は交互に話し、詰まると教師が手助けをして話を続けた。この後、教師はこの話の内容についてページ毎に確認していった。感嘆文について感嘆符を付ける理由を聞いたり、cynically という語の意味を質問したりした。

次に、この短編小説のテーマである「永遠に終わらない休暇」についてグループで話し合わせた。約 10 分間、どのグループも英語で活発に意見を交換していた。教師は各グループの話し合いを見て回り、意見が落ち着いた 1 グループに前に出て発表するように促した。女子生徒 4 人のグループは約 5 分間、各自が意見を述べた。どの生徒も、I also agree with you. I don't think so. I disagree with all of you. などと自分の立場を明確にしながら流暢に話をする技術を持ち合わせていた。教師は、例えば I can enjoy jet skiing all day long. という意見には、But we are talking about ENDLESS holiday here. Will you jet ski all day EVERY DAY? と EVERY DAY を強調して質問した。他の生徒は真剣に発表者の話を聞き、反応からは十分英語を理解していると見受けられた。

1.2 Shatin Pui Ying College

1978 年に、Hong Kong Council of the Church of Christ in China の附属学校として創立され、1998 年には EMI 学校としてスタートした。全生徒数は約 1,100 人、教師数は 58 人のうち英語教師 12 人、NET 1 人である。クラス数は、Secondary 1（以下 S1）から Secondary 7（以下 S7）まで合計 29 クラスあり、1 クラスあたりの生徒数は 30～40 名である。S6 と S7 では、人文系と理系のクラスに分かれている。

英語の授業は、S1 のみ 26～29 人程度の少人数で行われている。英語への興味を喚起し、英語力を向上させるプロジェクトも充実している。例えば、S1～S3 を対象とした 4 週間の Summer English Day Camp、S4 以降を対象とした 1 週間の Summer English Camp、3 週間の海外（オーストラリア・アメリカ・イングランド・カナダなど）での語学研修、ディベートやスピーチのコンテスト、2005 年から導入された S1～S3 を対象としたドラマの授業などが設けられている。また、外国からの交換留学生が在籍し、交流会も持たれている。

1.2.1 Secondary 2（中学校 2 年）の授業

生徒数は 38 人で、生徒が創作したリサイクルのロゴについてライティングのフ

ードバックとディスカッションの授業で、教師・生徒共に英語を使用していた。

生徒は、前時の授業で学んだロゴとスローガンに関する基礎知識をもとに、自分が作成したリサイクルのロゴとスローガンのデザインの説明を 90 語で、ロゴとスローガンの意味を 50 語で、スローガンを 20 語で書いてきていた。教師は、何例かのロゴと英文に対し、修正を加えたり、例文を出して比較したりしながらどちらの文がふさわしいか説明した。

次に、ワークシートに描かれている 8 つのロゴの違いについてペアで 5 分ほど意見交換をさせた。その後、教師は、話し合った内容について全体で確認をした。例えば、地球を食べているキャラクター (図 1) について、生徒からは「このロゴは、ごみを減らす必要があることを表す」などの意見があがった。また、教師からは「より学校の環境週間を意識したデザインにするには、どうしたらよいか」と問いかけ、生徒と教師がやり取りを続けながら、校章や学校名を入れることや、学校で見かける環境問題、さまざまなタイプのごみを描くことなど、関連する単語をワークシートに記入し、今後の改善点を確認して授業は終了した。スローガンについての話し合いや書かれた英文の文法について確認することは、次回に持ち越された。

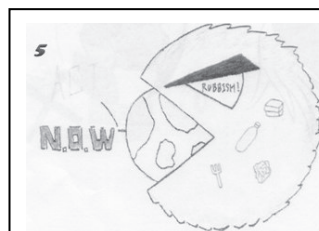


図 1 生徒が作成したロゴ例

1.2.2 Secondary 5 (高等学校 2 年) の授業

生徒数 30 人の「場所を描写する形容詞」の語彙学習の授業で、「形容詞を使って文章を書く」という目標に向かって、段階的に授業は進められていった。

始めに、生徒に 1 分間時間を与え、各自で場所を描写する形容詞をできるだけ多く挙げさせ、その後クラスで共有した。次に、gloomy, creepy, scenic, spooky など、場所を描写する 18 の形容詞を生徒と教師でやりとりをしながら意味と発音を確認していった。What is gloomy? Does it make you feel sad or happy? などと教師が単語

の意味やイメージを聞いて確認しながら授業が進んだ。

取り扱った単語を (1) unhappy / unpleasant (2) happy / pleasant (3) calm (4) nervous / scary の4つに分類する活動をペアで5分間行い、その後代表のペアが板書し、全体で単語を読みながら、確認をしていった。その後、教師は校舎内の「ある場所」の写真(合成写真)を見せ、その場所を描写する形容詞を生徒に挙げさせた。

最後に、ホラー小説の舞台として学校の場所が使われるように売り込む文章を書く課題に4人グループで取り組み、最低 40～50 語を使って英文を書いた。教師は生徒に形容詞の箇所に下線を引くように指示し、生徒はグループで英語で話し合いながら、1 パラグラフにつき概ね4～5つの形容詞を使って文章を完成させていた。本時はここまでで授業が終了し、次時に一番良い売り込み文章を投票により選ぶということであった。

1.3 C. P. C. Yao Dao Secondary School

2005年に創立された CMI 学校である。生徒数は、約1,000人で29クラスから成り、各クラスには30～40人の生徒が在籍している。教師は70人で、13人の英語教師のうち9人が中国語を母語とする教師、2人は母語が英語のカナダ生まれの中国人教師、2人がNETで、スピーキングの授業はNETが教え、文法の授業は中国語が母語の教師が教える体制をとっている。CMI 学校であるが、*fine-tuning*を行っており、第6・7学年では、5クラスのうち、英語の習熟度が高い1クラスの数学と科学の授業は英語で行っている。

英語の授業時間は、10日間で400分間を設定している。通常、香港では1単位時間は40分間であるが、この学校では、基本の1授業の長さを20分とし、指導内容によって柔軟に時間を変更している。例えば、20分間のリーディングの授業を行ったり、いくつかの時間を組み合わせて60分間行ったりすることもあり、生徒のニーズに合わせた指導を目指している(週当たりで換算すると約6～7単位時間分の英語の授業を行っていることになる)。第6・7学年ではさらに、週1単位時間のライティングの授業や専門の教師によるドラマの授業を設けている。

1.3.1 Secondary 2（中学校2年）の授業

生徒数は38人で、関係代名詞（主格、先行詞が物）に関する授業であった。最初に教師は、黒板に描かれた3つのモンスターの絵と I like... で始まる4つの文、1) I like orange one. 2) I like that elephant. 3) I like the monster which is in the right hand side. 4) I like the monster which has a big nose. を提示し、各文がどの絵を表しているかを生徒に考えさせて確認し、文の意味に注目するよう促した。さらに、教師は、プロジェクターに3つの犬の絵を提示し、生徒に関係代名詞 **which** を使った文を口頭で作らせた。教師は、特定の物の様子や特徴を示すためには、関係代名詞の文を使う必要があり、特に物を説明している部分は関係代名詞節と呼ばれると英語で説明していた。

続いて、教師は、提示した3つの関係代名詞を含む文を、生徒が理解し確認できるように、ワークシートを配布して作業をさせた。生徒は、シートに、主語には赤色の、動詞には黄色のマーカーを塗るように指示されており、例えば、I like the dog which is black. の文の I には赤色を like と is には黄色を塗っていた。教師は、which には、接続詞と主語の2つの機能が備わっていることを強調した。生徒は、その説明の後、関係代名詞 **which** の後半部分を赤のマーカーで塗りつぶして関係代名詞には主語の機能があることを確認した。

最後に、2枚のワークシートで練習とまとめを行った。ワークシートには関係代名詞の文構造の例と、2つの文を関係代名詞を用いて1つの文を作り、中国語に訳す練習問題が12問あった。教師は、ワークシートをプロジェクターで映し、生徒に音読させ、同じ主格の関係代名詞である **who** との違いについても触れた。ワークシートの練習を宿題として授業は終了した。

2. 香港の中等教育の英語授業からの示唆

紙面の都合でここまで4つの授業実践のみを見てきたが、香港の中等教育における英語の授業の特徴は、英語による授業と生徒を英語の「学習者」から「使用者」

へと転換することを目標とする教室内外での取り組みである。筆者らが参観した香港の学校では、初等学校段階から英語の授業は英語で行われており、中等学校段階では、教師の指示や説明などはすべて英語で、生徒同士の話し合いでも自然に英語が使われていた。日本と比べ、週当たりの授業時間数は圧倒的に多く、授業が英語で行われるため生徒が耳にしたり使ったりする英語量は多く、同じ年齢の日本人学習者よりはるかに英語の習得が早い印象を受けた。日本では、「英語で英語の授業を」と言われて久しいが、なかなか定着せず、生徒の既習表現ですら教師が日本語で説明をしてしまう光景もよく目にする。教室で生徒により多くの英語を使わせるには、まず教師自身ができるだけ英語を教室内で使用する必要がある。

しかし、同時に、授業すべてを英語で行う必要はないということも、今回のいくつかの授業を見て感じられた。文法規則や用語を英語で説明している場面では、教師の一方的な説明になりやすく、生徒がどこまで理解しているのかわからないこともあった。日本のように英語の授業時数が少なく、生徒が英語での授業に慣れていないのであれば、文法説明は母語で行った方が効率的である。その後で、学んだ文法を使わせるような活動をさせて、さらに必要に応じた文法指導を行うなどの工夫を考えるべきであろう³。

教室内外での教師と生徒との英語によるやりとりでは、教師は生徒が誤った部分を言い換えたり、より考えを深めるように質問したりして、生徒が英語を使って自分の意見や考えを述べるように支援をしていた。また、生徒自身が聞いたり、読んだりしたことをまとめて英語で伝えたり、考えや意見を述べて議論するなど、*English Language Curriculum and Assessment Guide, Secondary 4-6 (2007)* が提唱する、目的のあるコミュニケーションを授業の中でふんだんに行っていた。このような授業での取り組みが、生徒の豊かなコミュニケーションの体験になることを再認識し、日本においては、英語をコミュニケーションの手段として使う言語活動を取り入れなければならない。

さらに、香港の中等教育学校での取り組みは、授業外で英語を使う環境を創造することの重要性を示唆している。ミュージカル、英語新聞、英語フォーラム、映画

制作、コマーシャル製作などの英語を用いた様々なイベントが各学校や学校間の行事として計画・実施されており、生徒は英語を使うことの楽しさや有益感を体感することができていると思われる。また、このような英語を使ったイベントはNET主催の物もあり、各学校に配属のNETが中心となって生徒を指導している。授業外でも目的を持って英語を使用し、いくつかのタスクを達成して最後に大きな成果として発表をする、このようなイベントはプロジェクトとして捉えられ、学習者の動機づけを高めるものとして、*English Language Curriculum and Assessment Guide, Secondary 4-6* (2007) は勧めている。このように、英語の授業で学習したことを、授業外の活動と繋がる取り組みを増やし、英語学習への動機づけを高めていくことが日本の英語教育においても必要であると考ええる。

3. 総括 — タスク的な言語活動が示す英語教育の方向性

香港の英語教育は、タスクによる指導を提唱し、NETを活用し、教室で英語によるやり取りを生徒と行う中国人英語教師の資質管理を徹底し⁴、生徒を数々の英語イベントに参加させることで英語を使用する機会を最大限に増やしてESL環境を堅持している⁵。筆者らが参観した授業を見る限り、その英語教育は成果を挙げているように見える。ヨーロッパ諸国のような外国語教授の共通枠組み(CEFR)は採用せず、独自の基準を設け、評価のガイドラインには評価の例示を掲載して教師への周知を図って英語教育の質を児童・生徒に保証しようとしている。しかし一方で、生徒や保護者のテスト志向は強く、上記の理念を実践しているとは考えにくい授業があるのも事実である。

日本の英語教育の方向性は、小学校から高等学校までの学習指導要領に記載されているように、外国語を通して、「コミュニケーションに対する積極的な態度」を育成することである。そのためには、ペアやグループで、目的を持ったコミュニケーションをしながら課題解決をするタスク的な言語活動に取り組む機会を教室内外で創り出すことが必要である。このような言語活動では、お互いの英語を理解しようと、聞き返したり、言い換えたりしてコミュニケーションを図ろうとする

努力が求められる。コミュニケーションの相手に配慮して働きかけていく経験を通して、「コミュニケーションに対する積極的な態度」は育まれる。また、香港の取り組みに見られるように、協働学習を取り入れて全学習者の成績の底上げを図り、外国語教育に関わる水準の向上を目標とする姿勢⁶も学ぶべきであると考える。

注

- ¹ 学校訪問にあたり、各学校への紹介の労をいただいた香港教育学院の梁長城教授および快く授業を公開いただいた訪問学校の教職員の皆様にご感謝申し上げます。尚、本研究には、平成23年度星城大学経営学部特別研究奨励費を一部充当した。
- ² 香港の中等教育学校では、学年をForm 1～7, Secondary 1～7のように表記する。本稿では、各授業の見出しに、日本の学校制度での相当学年を併記した。
- ³ 高島（2011）は、コミュニケーションの場面を明確にした文法説明の後、学んだ文法を実際に使うタスクを行う「フォーカス・オン・フォーム」アプローチが、日本の英語教育には適切であるとしている。
- ⁴ 香港の中国人英語教師は、Language Proficiency Assessment for Teachers (LPAT) と呼ばれる試験を受けて一定レベル以上の成績を収めることが要求される。4技能の他、英語による授業も評価される。
- ⁵ ほとんどの生徒の日常言語は広東語である。一方で、英語は公用語であるため、大学や職場では英語を使うことが求められる。この点で、香港の初等・中等学校の英語学習者の英語学習環境は、第2言語が日常的に使用されているアメリカなどのESL環境とは異なっている。教育局はそれを認識し、様々な手立てを講じてESL環境を整えようとしている。
- ⁶ 協働学習により、すべての学習者の平等を目指している国にはフィンランドがある。フィンランドも香港も国際学力テストPISAの結果は常に上位を占める。これは学習者間の学力格差が小さいことが一因とされる。

参考文献

香港教育省. <http://www.edb.gov.hk>

香港考試及評核局. <http://www.hkcaa.edu.hk/en/hkcee/>

高島英幸（編）（2011）.『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店.

村上美保子 他（2006）.「フィンランドから日本の英語教育への示唆 — 教育水準世界一の国における英語教育 —（前）（中）（後）」『教職研修』3月号 pp.119-127; 4月号 pp.56-65; 5月号 pp.72-81. 教育開発研究所.

Education Bureau (2010). *Enriching Our Language Environment Realising Our Vision: Fine-tuning of Medium of Instruction for Secondary Schools*. Hong Kong: Government Printer.

Education Commission (2005). *Report on Review of Medium of Instruction for Secondary Schools and Secondary School Places Allocation*. Hong Kong: Government Printer.